

寺田縄の日枝神社は、かつて「山王権現」を祀る神社として、山王社・山王権現社と呼ばれていました。明治時代になり、新政府の「神仏分離策」により仏教の意味合いを持つ「山王社」を改名して、「日枝神社」とされました。

日枝神社に関する古い文献には「相中留恩記略」と「新編 相模国風土記稿」の二点が認められます。いずれも江戸時代の後期に著わされた文献です。両史料から寺田縄の山王社についての記述を検討いたします。

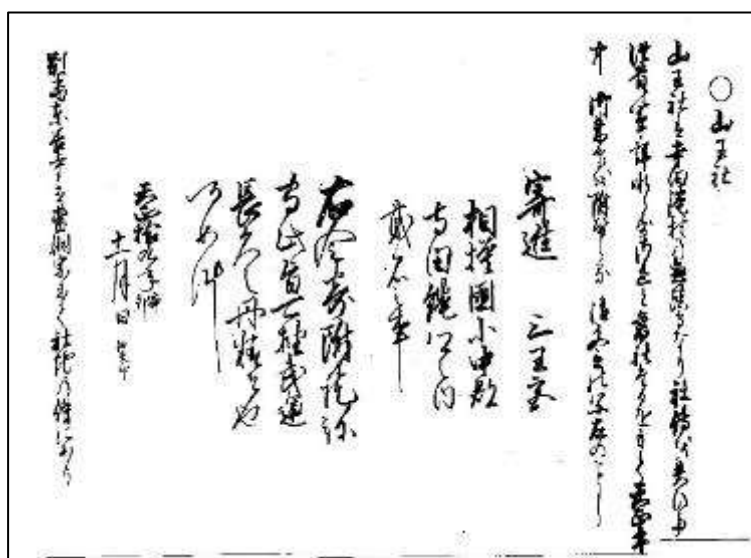
### （イ）「相中留恩記略」

「相中留恩記略」：全二十六冊の内、二十五冊は天保十年（1839）に完成し、残りの一冊は安政年間に完成しました。

相模国鎌倉郡渡内村（現・藤沢市渡内）の名主福原高峯が、江戸の絵師長谷川雪堤の協力で、相模国の名所旧跡のうち、徳川家康由来の遺跡と名勝を探訪し、絵図と文言を添えて編集した地誌です。二人は、相模国の徳川家康に所縁のある寺社を巡り、寺田縄村にも訪れ、山王社についての貴重な記録を残しました。

当時の地誌は、官撰の地誌が主流でしたが、「相中留恩記略」は民撰の地誌として、その内容は「江戸期の相模国の様子を知るうえで欠かせない史料となっている」と評価されています。

- 山王社（現・日枝神社）について、次の文言と絵図が記されています。



○ 文言は、

○ 山王社  
山王社は寺田繩村の総鎮守なり社伝を失いて  
往昔の事詳ならずされど旧社たるをもって天正年  
中 御朱印を附せらる御文言の写し左のごとし  
寄進 三王宮  
相模国小中郡  
寺田繩郷之内  
式石之事  
右令寄附訖、弥  
守此旨、可抽武運  
長久之丹精者也  
仍如件  
天正拾九年<sup>辛卯</sup>  
十一月 御朱印  
別当東善寺は曹洞宗にて社寺の傍らにあり

と記されています。

- ① 『山王社は寺田繩村の総鎮守なり。社伝を失いて往昔の事詳ならず。されど旧社たるをもって、天正年中、御朱印を附せらる。御文言の写し、左のごとし』

「山王社は寺田繩村の総鎮守である。  
社伝がなく、昔の詳しいことは分からない。  
しかし、古い歴史的な社であるので、天正年代に御朱印が賜与された。  
御文言の写しを次に記す」

- ② 続いて、「御朱印状の文面」が記されています。

『寄進 三王宮』とありますが、『寺田繩郷の内』、ですので、山王社のことで  
す。山王社の所在は、『相模国小中郡寺田繩郷』  
『式石之事』朱印高は二石。神社の所領として2石分を賜与されました。  
『右 この旨を守り、武運長久に励むべきである。  
前記の通り。 天正十九年辛卯 十一月 御朱印』  
(天正19年(1591)11月のことです)

③ 『別当東善寺は曹洞宗にて社寺の傍らにあり』

「山王社には神職が在住していないので、神事やもろもろの社務を執り行う別当職は、神社に隣接している曹洞宗の東善寺が当たります」

○ 前頁の文言の上部に記されている絵図です。

江戸の長谷川雪堤という絵師が描きました。



群なす野鳥

山王社の文字

寺田縄村の文字

三人の農作業

広がる水田

寺田縄村を西の方角から見て描かれています。(小高い真田村からと思われます)

広い農地の向こうに寺田縄村と山王社との文字が読めます。寺田縄村の周辺地域が描かれています。江戸時代後期の様子です。のどかな田園風景が現わされています。

絵図には、山王社のこんもりとした森、「山王社の大松」といわれた大木が他の木々を圧倒しているようにも見えます。(藤沢からも見えたといわれます)

手前は農作業でしょう、鍬を持ったような二人に合わせ、三人の農作業の様子が読み取れます。空には、鳥が群れ飛んでいます。

#### ○ 山王社（現・日枝神社）

前述のとおり、福原高峯と絵師長谷川雪堤の二人が、江戸期の末、相模国（神奈川県）徳川家康ゆかりの旧跡を訪ねました。我々の「山王社」（現・日枝神社）にも見えています。

家康ゆかりの山王社は、社伝が失われているので、創建の時期、その後の移り変わりなどは不明でも、古く由緒ある神社とされています。それをもって2石の御朱印を賜っています。

「山王社」（現・日枝神社）は御朱印を賜ることのできた神社です。

- このような記述から、山王社（現・日枝神社）は、私たちにとって実に誉の高いお社といえます。

#### （口）新編相模国風土記稿

新編 相模国風土記稿：天保十二年（1841）幕府の地誌編纂事業として武蔵国風土記稿について、17年ほどの歳月をかけて完成されました。編纂の方法としては文献や資料を調べ、調査項目を現地の村に送り、その後役人が村々を訪れ、一問一答形式で調書を作成し、幕府により編纂されたと云われます。

実地調査に基づく内容であり『江戸時代に編纂された幾多の地誌の中で、その内容の詳密さ、そして正確なことは比類がないと定評を有する』（大日本地誌体系 雄山閣）

#### ○ 記述

山王社 村の鎮守なり、拝殿あり、神体木像（長五寸）、天正十九年十一月、社領二石の御朱印を賜ふ、四月中の申の日祭る

鐘楼 延宝二年の鐘を掛

末社 神明 瘡瘡神

別当東善寺 山王山と号す、曹洞宗（吉祥院末）本尊薬師（行基作、長二尺四寸）、開山蜜州長巖（本寺三世、寛永三年八月廿日卒）

文意は、

- 「山王社は、寺田縄村を守る鎮守です。社には、村の人たちがお参りする拝殿があります。高さ約15cmの木で作られた御神体が安置されています。天正十九年（1591）十一月に、徳川家康から神社の所領として2石分の御朱印を賜りました。おまつりは四月の申の日に行います。
- 延宝二年（1674）に造られた梵鐘を掛けた、鐘楼があります。
- 境内には神明社（天照大神）と疱瘡（ほうそう）神を祀った末社があります。
- 山王社には神主さんが居ないので、山王山 東善寺の住職が別当として山王社の祭事・儀礼・社務等を担当しています。東善寺の宗派は曹洞宗で吉祥院の末寺です。御本尊は高さ二尺四寸の行基作の薬師を祀っています。開山は東善寺の三代、蜜州長巖禅師で寛永三年八月廿日にご逝去されました」となります。

江戸時代の末、幕府の調査によると、日枝神社はこのように把握されていました。

- 「相中留恩記略」と同様に、山王社の創建の時は記されていません。両者の記述に共通するのは、寺田縄村の鎮守として皆に崇められていること、二石の御朱印を賜ったことが記されています。御朱印状の原本の所在はわかりません。